

岐阜柳ヶ瀬の形成

岐阜大学 ○高村匡祐 出村嘉史

1. はじめに

近代都市にとって繁華街は都市の重要な集客装置であった。この繁華街が都市に形成されるまでの間には、様々な政治的要因やまちに対する地元民の思いがあった。本研究ではそのような視点を持ちながら、岐阜を代表する繁華街・柳ヶ瀬に注目する。この土地には、過去に「金津遊郭」が存在した。花街として明治中期のころに開設され遠地からの来客も多く、全国的な知名度を誇る遊郭までに成長した¹⁾。

本研究では金津遊郭の成り立ち、およびこれに伴い発展したとみられる柳ヶ瀬に着目し、これらの経営が岐阜市の都市形成においてどのような役割を果たしたのかを明らかにすることを目的とする。

2. 金津遊郭とは

金津遊郭は、明治21年8月に土地所有者・大矢富次郎らによって開設され、第2次世界大戦以前まで岐阜市内に存在した遊郭である。もとの地勢としては川やハス池、田畑などがあり、人が行き来をするような場所ではなかったとされているが、遊郭開設後は、「押すな押すなの大景気だった」といわれている²⁾。また、他県からの来客が多く¹⁾、知名度としては全国的であった。

現在の岐阜市における柳ヶ瀬の位置を、図-1に示す。青線は、柳ヶ瀬通の位置である。青線付近を当時の地図により確認すると図-2のようであり、金津遊郭(図中「金津廓」)のおおよその場所が把握できる。金津遊郭の実際の敷地を示す現存する資料は、極めて少ない。1975年岐阜日日新聞「やながせ」という連載記事があるが、これは記者が新聞で地元住民に呼びかけて集めた情報であり、当時多くの住民が共感していたという事実より、ある程度の信憑性は認められる。また図-3は、岐阜日日新聞が1975年頃に行った、昭和初期の金津遊郭を知る地元住民の方を対象としたヒアリング調査により、金津遊郭内部の区画を表したものである。柳ヶ瀬通と金津遊郭の境目には大門があり、店舗数が110戸あった事がわかる。また川に沿って囲っている土地を金津遊郭敷地としていることが考察された。この資料から金津遊郭の規模と、図-2でも示した枠内が金津遊郭であることが把握できる。

3. 岐阜と市制

明治21年5月24~31日に発行された岐阜日日新聞の論説⁴⁾から当時、市制と金津遊郭には密接な関係があったことが挙げられる。明治21年4月17日に「市制町村制」が全国に発布され、明治22年4月1日から実施された。しかし岐阜で施行されたのは、3ヵ月遅い明治21年7月1日であった。市制町村制及理由³⁾によれば「人口凡二万五千以上ノ市街地ニ在リトス」と条件を定めて

おり、岐阜において市制施行条件を満たしたのはこの頃であったと考察される。仮に市制施行が叶わない場合「全市街ノ為計画シタル事業ハ一時ニ廃止ニ帰セザルヲ得ズ」とし、現在までに岐阜において行ってきた道路整備などの事業を廃止せざるを得ないことを記している。そのような理由から、市制施行に向けて市街の規模を拡大するためにも「先此工事ノ成功ヲ急カザルベカラズ」とし、岐阜市となる準備を着々と行っていた。

財政難であった岐阜は、道路整備費等の費用をどこかで補う必要があった。この時期からしばしば娼妓館設置論が岐阜において挙がり始め、岐阜日日新聞の記事⁶⁾では「岐阜公園ノ開設ニ際シ当地及加納町ノ有志者中右設置出願ノ計画ヲ為居ル者有ト云フ」と伝えられている。この事からも、市制と娼妓館(後の金津遊郭)は密接な関係があったことが考察される。



図-1 岐阜・柳ヶ瀬の位置



図-2 岐阜市旅館案内図(昭和初期頃)

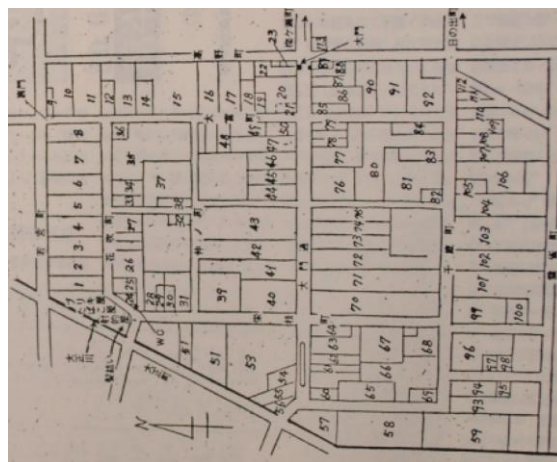


図-3 金津遊郭の構造(1975年作成 昭和10年頃)

4. 金津遊郭の成立と都市整備の関係

前述の連載記事「やながせ」には、「岐阜の中心部と駅を結ぶ八間通り(今の神田通)が開かれた。また現在の西柳ヶ瀬に金津遊郭が設けられ、八間道から遊郭への道(柳ヶ瀬通)も誕生した」⁹⁾との記述がある。これに従えば、金津遊郭が出来たことによって、八間道を歩く人を遊郭に誘導する必要があった。そこで、柳ヶ瀬通ができ発展していった事業の流れが把握できる。また「金津遊郭や芝居小屋、露店の出現が柳ヶ瀬の人通りを多くし〜(中略)〜将来を見込んで出店が進出、雪だるま式に発展した。」⁷⁾というように、柳ヶ瀬通には活気が集まっていた様子が描かれている。明治24年と大正9年の地図(図-4)と(図-5)を比較してみると金津遊郭の方に向かって柳ヶ瀬通周辺が発展し田畑が、商業地や住宅地になっているのがわかる。

先述の岐阜新聞記事「やながせ」では、遊郭開設するにあたって、「岐阜県に遊郭がないから名古屋などの他県へ遊興費が流れる」ことや、「県外へ娼婦として出かせぎへ出る者が多いのは県下に遊郭が無いから」という声もあったとされることが書かれている⁸⁾。この文脈から、遊興費を県内に留めようとする風潮があったことが推測される。



図-4 明治24年の柳ヶ瀬通地図



図-5 大正9年の柳ヶ瀬通地図

では実情と対策はどうであったのであろうか。次に表すのは、明治36年6月13日に発行されたもので、金津遊郭を設置するにあたって岐阜県知事・小崎利準への届出についての資料である。これは、営業5年目の遊郭の移転について書かれたものであるが(実際には移転しなかった)、この中の「金津遊郭開設ノ関係」では、営業が許可されるまでの流れについて以下のように触れられている。

「金津遊郭開設ノ件」⁹⁾

明治二十一年七月三十日岐阜市美園町大矢富次郎他八名ヨリ金津遊郭開設ノ出願セリ 時アタカモ当局者二於イテハ岐阜市区劃張ノ計画アタカモ、ソノ費途ニ窮シオリタルヨリ 市区改良上、道路開

通停車場移転等ノ費用トシテ金二万二千円支出スルトナリ、許可スルニ至リタリ (下線: 著者)

上記に従えば、金津遊郭開設に関わっていた人物は、大矢富次郎とその他に8人の有志者がいたことがわかる。また岐阜市としても、市街地拡張を行おうとする計画はあるが、財政が苦しく、資金調達に困っていることが資料から考察できる。その中でも道路開通や停車場開設の費用として2万2千円必要であり、遊郭開設を許可することを条件に、それらを大矢富次郎と有志者8名に公共事業費の支払いを求めている。

下記は明治21年8月7日に発行されたもので、岐阜県知事・小崎利準に宛てて提出されており、差出人・大矢富次郎が金津遊郭開設にあたっての契約を交わした時の約定書¹⁰⁾である。

道路開設費及公益費途ノ内差出、右遊郭ニ関スル全権及将来ヲ願人ノ資格一切拙者共引受候

上記の内容から道路開設費や公益費を大矢富次郎らが出費するかわりに、遊郭に関する全権を有志者らが引き受けることが記されている。このように大矢富次郎は、出資に関して様々な利権の取り決めを、市との間で交わしていたことが確認できる。

5. まとめ

現在までに翻刻した資料から、岐阜において市制が施行されるにあたって、金津遊郭と岐阜市のインフラ整備に関わりがあったことがわかった。市制が施行されない場合、市街地拡大の為に進めてきた道路事業などが廃止にされるリスクがあり、娼妓館設置論の必要性は大きく取上げられていたことがわかった。これまでの結果から金津遊郭が誕生するにあたって、大矢富次郎らが利益を得る目論見と、岐阜市などの社会繁栄の目論見の2つが存在し、双方の目的が合致したために、金津遊郭ができたといえる。

今後、研究を進めていくにあたって、金津遊郭のキーパーソンとされる上加納村の戸長でありながらも有志者であった坂井田民吉や大矢富次郎に着目してゆき、また柳ヶ瀬が形成されるまでの資料をさらに調査し、顛末を明らかにしたい。

参考文献

- 1) 岐阜日日新聞「やながせ第1部」, 1975.6.7
- 2), 5) 岐阜日日新聞: 「やながせ第1部」, 1975.3.6
- 3) 高木周次, 市制町村制及理由, 1888.5.16
- 4) 岐阜日日新聞: 「市制町村実施ノ準備」, 1888.5.24~1888.5.30
- 6) 岐阜日日新聞: 「又も娼妓」, 1888.6.12
- 7) 岐阜日日新聞: 「やながせ第2部」, 1975.5.1
- 8) 岐阜日日新聞: 「やながせ第4部」, 1975.5.30
- 9) 内務省警補局, 岐阜市金津遊郭地ノ件, 1903
- 10) 内務省警保局, 約定書, 1888